

千歳空港開港90年

空港とともに発展する千歳

新千歳空港の乗降客数は、平成27年に初めて2千万人を超えて2千45万人となり、過去最高になりました。

特に国際線は、円安やアジア圏を中心とした観光需要の高まりなどにより乗降客数が200万人を超え、国際線エプロンの拡張や誘導路の新設などを実施する「国際線ターミナル地域再編事業」が計画されるなど、国際拠点空港としての発展も期待されています。

空港は、大正15年に村民総出の労働奉仕による着陸場づくりに始まります。今年はその着陸場が出来て、はじめて飛行機が着陸してから90年の節目を迎えます。

これを機会に、当時の村民の偉業をたたえ、空港とともに発展してきた千歳の歴史を次世代を担う子どもたちに引き継いでいくとともに、新千歳空港のさらなる発展の契機にしたいと考え、関係団体と協力して「ポスター掲示によるPR」、「空の日記念事業」、「毛利衛宇宙飛行士の講演会」などの記念事業を実施しました。



9月10日(土) 空の日記念事業 新千歳空港で行われた飛行機と綱引きの様子



大正時代、室蘭街道の宿場町、千歳村に鉄道が開通し駅ができることになり、小樽新聞社（北海道新聞社の前身）では、この機会に千歳にある「ふ化場」の見学を兼ねた旅行会が企画されました。



小樽新聞社は旅行会で一休みをするときにお茶とお菓子の用意を村に依頼したところ、村人は快諾しお昼ご飯まで出すという申し出に大変喜び、お礼に旅行会の日、千歳の空に飛行機を飛ばす提案が新聞社からありました。



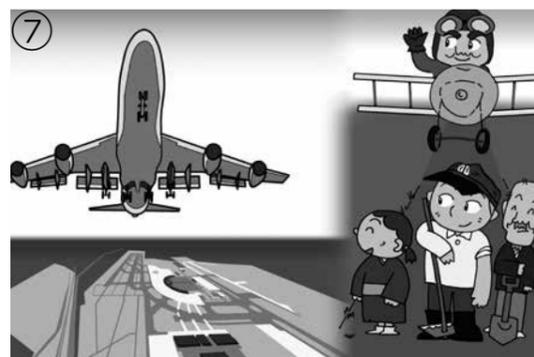
多くの村民は、着陸してもらい飛行機を近くで見たいと思いましたが、着陸場がないため断られました。しかし、みんなの願いが強いため、村民大会を開き自分たちで着陸場を造ることを決意しました。



子どもからお年寄りまで、一致団結して2日間で着陸場を造り上げました。



大正15年10月22日、酒井憲次郎飛行士が操縦する2枚羽のプロペラ機「北海第1号機」が旋回しながらピロをまき、午後1時20分、村民が造った着陸場に着陸しました。近隣からも集まった約1万人の観衆が熱烈歓迎し、村民代表の女の子が酒井操縦士に花束を渡しました。



このように、今から90年前、酒井操縦士と「北海第1号機」が降り立った村民手造りの着陸場が現在の空港の始まりです。

ちとせの空の歴史をたどる

この記事の
お問い合わせ

空港政策課
空港調整係
☎(24) 0467

